

平成28年度 第2回生涯学習審議会 議事録

1 日 時

- 平成29年2月10日（金） 14：30～17：00

2 会 場

- 県庁4号館 教育委員会室

3 出席者

- 宮崎県生涯学習審議会委員 ※別紙

4 開会行事

- 会長あいさつ

5 説 明

- 県が考える「新しい『ゆたかさ』」について
(※ 県総合政策部総合政策課より説明)

議 長 ただいまの総合政策課からの説明に対して、質疑等はないか。

委 員 本県は、ゆたかさ指標が10位ということであるが、1位、2位はどこか。

総合政策課 あくまで、本県の置かれている状況を理解するための指標であるため、順位については、公表していない。また、県民の平均的な感覚でウェイトをかけた数字であるので、県民性が影響する。全国的に大きな格差はない。

委 員 若者流出についての県の展望について聞きたい。

総合政策課 方向性としては、若者が帰ってくるために必要な経済的な支援についての施策の検討している。

委 員 小学校の修学旅行は、鹿児島県によく行くが、鹿児島県から本県にはあまり来ないが、宮崎県の魅力発信という観点からどのような取組を行っているのか。

総合政策課 修学旅行として何を求めるかであり、修学旅行にふさわしい教材の掘り起こしが必要である。もう1点は、宮崎県民が宮崎県内で観光するという取組を行っており、県民の宿泊者100万人という目標を達成している。県内をよく知ることは、生涯学習としても有益なこととだと考えている。

委 員 ゆたかさに、「新しい」という言葉をつけているが、どのような期待をしているか。

総合政策課 従来のゆたかさは、経済的なゆたかさに重きがあった。これからは、経済的に大きな成長が望めない時代であり、価値観の多様化という点からも、ゆたかさの概念を広

げるという意味で使っている。

- 第1回審議会のまとめ
(※ 事務局より説明)

6 協 議

「持続可能な地域社会を創るみやざきならではの生涯学習の在り方について」

議 長 ただいま事務局から説明のあった審議の柱等について、質問等はないか。

議 長 なければ、「宮崎ならではの学びの創出」「地域で学びを生かす方策」の2つの柱で今後すすめたい。今後の審議のスケジュールについて事務局より説明をお願いしたい。

(※ 事務局より説明)

議 長 「宮崎ならではの学びの創出」ということで、各委員から事例等を出してほしい。

委 員 持続可能な地域社会をつくるために、まずは若者の流出を止めることが必要である。なぜ、若者が宮崎から離れているのか、県として把握していることがあれば聞きたい。

総合政策課 高校生の就職について、賃金格差や地元企業の知名度という点がある。また、大学を卒業後の就職先の数も考えられるが、これらが全てではない。

委 員 大学の数など、学びの点からの原因はないか。15歳からの流出が多いということだが、宮崎から人口が流出している原因が分かれば、宮崎ならではの学びのヒントになるのではないかと考えている。

また、逆に県外から宮崎に来ている方が、そのまま移住すれば、人口増にもつながるのではないか。

事務局 絶対的な数で見れば、宮崎県に大学の数等は少ない。高校のない町村もあるので、中学を卒業すると同時に必然的に域外へ出ていく。最終的に目指しているのは、地域からでたととしても、宮崎のよさ、地域のよさを小さい頃から学ぶことによって、地元に戻って何かしたいと考えたり、県外から地元のために何かしたいと考えたり、するための学びを創出したい。

委 員 就職については、御存じの方も多いと思うが、県内就職率がワースト1となっている。その原因は、地元の企業をよく知らない、卒業生の数に応じた企業の数がないことが考えられる。今年度に入って、地元企業とのマッチングの機会が設けられている。本校は、以前から県内志向が強いが、地元の様々なイベントに出て企業の方々に接することで、地域のよさ、課題に気付き、将来、地元の貢献できることはないかと考えるようになった。このような場をつくっていくことが必要である。

また、自分が目指すことができる大学が県内にない場合は、県外に出ることはやむを得ないと思うが、将来宮崎に戻って来て、学んだことを生かして地元のために頑張

りたいという思いをもてるよう郷土愛などを育むのが学校の使命だと思う。

委員 先月地域づくりの集まりに出席したのだが、その中で県内の中学生と高校生が登壇した。二人は地元商店街の再生について関わっており、本気で大人が地域を変えようと頑張っている姿を見て、県外の大学志望だったが、県内大学への進学を決めたという話をしていた。地元の大人と一緒に何かをすることの重要性を感じた。

一方で、子どもたちが夢に向かうために外に出るのはしょうがない。海外へのハードルも下がっているので、そこで見聞を広めたり、様々な経験をしたりすることで、地球人として地域を見つめ直し、宮崎県外にいるからこそできることもある。地元が魅力的であること、無理に地元を押し留めようとせず元気に送り出す方が、また地元へ帰ってくるのではないか。

委員 今のような取組は、県内各地で行われている。地域の課題解決に取り組むために、例えば、高校と広告代理店が地元のPR動画をつくる取組であったり、高校生、大学生、社会人が一緒になって「わけもん会議」という地元を活性化するためにグループワークで行う取組をしたりしている。また、学校の課題学習の中で地域の魅力づくりを研究し、市に提言したり、地元の企業とコラボして、地元の特産物をPRしたりする取組もある。

自治体と学校と企業が一緒になって地域の課題を解決することで、地元への愛着、地元に残りたい、一度外に出ても戻って来たいという気持ちを育むことにつながる。

委員 私たちがこれから問わなければならないのは、「若者の流出」という部分に軸を置きつつも、普遍的な宮崎ならではの豊かさについて協議を深めることが重要である。

福岡から来て3年目になるが、宮崎は自然の豊かさ、人の繋がり、文化、神楽や祭りという歴史などが残っている。福岡で伝統文化が衰退したり、無くなっていくのを見てきたが、「残っている凄さ」が財産である。また、青年団やNPO活動などの地域活動も盛んである。NPOについては、人口規模で言えば、宮崎はNPO活動はかなり活発である。

高校卒業後の人口流出がワースト1位という話があったが、Uターン・Iターン日本一を目指すというのもよいのではないか。子育ての満足度が高いという数値も出ているので、一度外に出て、子育てに帰ってくるというものを旨とするのもよい。

私が宮崎に来て一番驚いたのは、自治公民館活動が活発で、草刈り活動のような日常の暮らしを守る活動を地域の方々が総出で行っていることである。そのようなことを、私たちが宮崎ならではの学びの創出で掘り起こし、価値を見出して、県民に知らせることが必要である。

県外からの宮崎の評価は大変高いので、それをもっと活用できないか。県内の人には見えない宮崎のよさをもっと発信した方がよい。

議長 宮崎のよさをどういう形で学びの場として提供できるか、どのような学びの場があるかということで他にないか。

委員 宮崎ならではのよさの一つに、外から来る人を受け入れるというのがある。やる気のある人が来ると何でも好きなことができる場所ではないか。私はNPOを3つやっ

ているが、反対することもないし、自分から引っ張っていくということもないが、手伝いますという人は多い。価値観の多様性というものが自然に受け入れられている特性があるのではないか。

委員 同窓会をすると、県外の大学に行っていた人たちも結構宮崎に帰って来ている。宮崎から出ていった人のデータはあるが、帰ってきた人のデータはとっているのか。

宮崎ならではの学びに関しては、若い世代はもちろんだが、子どもから高齢者まで全ての世代が取り組める学びというものが大切で、例えば宮崎県は「日本一の読書県」を目指しているので、そのような県民みんなで取り組む学びを考えていくことが必要である。

委員 昨年度、高千穂郷・椎葉山地域が世界農業遺産に登録された際に、高校生が五ヶ瀬町内でホームステイをした経験についてスピーチをしていたが、その受け入れをした家庭が、どんな考えで受け入れて、どんな話をしたのを聞きたい。

また、私は日南発祥の四半的をやっているが、地元の文化をいかにして伝えていくか、地元の祭りなどをどう伝えていくか、が大事である。

委員 宮崎のよさを学ぶことができる場所は、学校、公民館、図書館など様々ある。学校の中では、地域学習を行ったり、まちづくり協議会の中で、地域の課題について地域の強みで盛り上げたりしている。しかし、地域のよさを体験するだけではなく、課題について、どのように解決するのが大事である。学校教育の中で、課題を見つけ、解決し、実践をするという学び方を身に付けさせることが必要であると考えている。

委員 退職した先生をボランティアとして、学校の教育活動へ支援する姿が県内各地で見られる。それぞれの年代の人を生かす必要がある。

例えば、学校支援ボランティアの方々の活動は、子どもたちにとっては、地域の大人のよさを知る機会になり、高齢者の方々にとっては、自分が地域のために役に立っていることを実感できるよさがある。

学校と地域のボランティアの方々をつなぐコーディネーターがいるネットワークづくり、それが生かされる仕組みづくりが、宮崎のよさをバックアップするものになるのではないか。

議長 参考資料につけている高知県南国市稲生地区についてであるが、PTAに地域を意味する「C」をつけたPTCAという活動をしている。昨今の教育の課題の原因は、学校現場だけではなく、家庭を含めた地域社会に問題がある。地域が完全に機能していれば様々な活動ができるという事例である。

委員 今はただ経験するだけで終わってることが多い。準備されたことをするだけで終わって、次につながらない。経験した子どもたちが自分たちで立案して、経験したことを下の子たちに伝えるような教育が学校でも地域でも必要なのではないか。

委員 本市で取り組んでいる「熱中小学校」について紹介したい。内閣府の地方創生交付金を活用した地域の人材を育成するという取組である。本市の人材を育成するだけで

はなく他県からの参加も可能で、本市を知っていただき、地元に戻って本市を発信していただければと思っている。全国の講師を招き、大人も子どもにかえて、7歳の目線で様々なことにチャレンジするという取組である。先ほどから出ていた若者流出についてだが、子どもたちが本市を出るときにプレゼンターになってほしいという考えで、グローバルキッズ事業というものを行っている。地元で頑張る大人たちが先生になって小中学生に講義をするという取組である。さらに、次年度からは地域の専門性のある高校生が先生となって大人に講義をすることも考えている。

委 員 今ずっと話を聞いていたが、これらはすべて「ツール」である。それぞれの得意分野を使って、人と人がつながっていく、そして、それを伝えていくということを学びとしてできたらよいと感じた。

委 員 宮崎の文化を演劇の手法を使って伝えていくことは大事だと思う。先日、「ドラマケーション」という文部科学省の委託によって開発された演劇の手法を使った表現教育のプログラムがあり、そのワークショップに参加した。ワークショップで話をされた日本大学の渡部教授によると、日本人のようにおとなしく、黙って先生の言うことを聞いて、成績がよい生徒は、海外では授業に参加していないとして問題があるのではないかとされるということである。

「ドラマケーション」のような手法が、学校や地域の中に少しでも浸透し、学び方を学ぶトレーニングが小さいころからできれば、将来様々な学習や体験をしていく中で、学びによる気づきが生まれやすくなるのではないかと思う。

(休息)

議 長 柱の2つ目「地域で学びを生かす方策」について、意見はないか。

委 員 事務局にも確認しながらであるが、「学び」をどう捉えるかであるが、生涯学習における「学び」は、個人的な趣味や教養から、地域づくりまで含めたものと捉えてよいのか。

事務局 はい。先ほど説明の中でも触れたが、座学だけではなく、体験等も含めた広い意味での「学び」として考えている。

委 員 柱の1つ目の「宮崎ならではの学びの創出」が、町づくり、清掃活動、神楽や祭りなども学び実践と捉え、学び実践の掘り起しを行っていくと捉えると、2つ目の柱「地域で学びを生かす方策」というのは、少し矮小化されてしまうような印象がある。「地域をつくる学びへの方策」のようなイメージではないか。

事務局 先ほどの議論にもあったが、地域のよさを掘り起し、体験するだけで終わるのではなく、どのような形で伝えていくか、自分が知るだけではなく、アウトプットもしていくという意味で「生かす」という言葉を使っている。

委員 広く県民に答申の意義を共有していく中で、ここでの議論を聞かず文章だけで見るときにそのニュアンスが汲み取れるかが重要なので、少し柔軟に審議の柱も考えつつ今後議論していければと思う。

また、先ほど宮崎のよさはたくさんあるのに、経験して終わっているという話があったが、「地域参加」から「参画」へのプロセスが重要である。

地域での学び、実践が、体験をするだけで終わらず、子どもたちから「参加」から「参画」のプロセスを見通した生涯学習実践を創っていくことで、「お客様」から「担い手」に移行していく方策を考えていく必要がある。

議長 皆さんから具体的な実践例を出してほしい。

委員 本当に必要なのは宮崎県に根を張って生きることの覚悟をどう継承していくかではないか。それがなくて、外に出たら戻ってこないということにもつながっているのではないか。

委員 私は前職がカメラマンで、公民館講座の講師をした。平日の昼間なので高齢者の方が多く、何かを学びたいという意欲が高かった。この学びたいと思っている高齢者世代がこれからの時代は、最も人口が多く、高齢者が元気であることが、将来まちが元気であることにもつながるのではないか。

また、高齢者だけでなく、若い世代も住みやすい町として、外に発信することができたら、その町に住みたいと思う人も増えていくのではないか。

みんなでサポートし合える、人と生きていくことを学ぶことができれば、文化や伝統なども継承されていくのではないかと考える。

委員 本市では学びの機会が多い。特に高齢者が多く集まって、生き生きと学んでいる。自分が何か学んで役に立ちたいという思いをもっている方が多い。様々な学びの中で自分の居場所を見つけると生きる力につながる。宮崎県は自殺率が高い県でもあるが、学びによってその数も減るのではないかと思う。

委員 宮崎には各地に神楽や祭りが残っているし、経験豊かな高齢者が多くいる。これらを生かした地域づくりが考えられないかと思っていて、安易に学校にというわけではないが、やはり学校の教育活動に地域の経験豊かな方々がもっと入って、学校から外に出ても地域とのつながりあるというのが、幸せな地域になるのではないかと思う。

先日、宮崎県生涯学習実践研究交流会の三浦清一郎先生の講演で、自分に少し負荷をかけることが健康寿命を延ばすことにつながるという話を聞いた。今の高齢者は、高齢者教室に通って、自分の楽しみだけで終わっている部分があるので、もっと地域の保育園や学校や地域の行事などで、子どもたちと触れ合う機会を作り上げていけないかと考えている。

委員 子ども会で恵方巻きを作った時に、地域の高齢者を呼んで協力してもらった。全く関わりのない子どもたちが、高齢者の方々に懐いていた。小さいことだが、三世代交流が大事だと感じた。

委員 子ども会もなかなか保護者が参加しない家庭もあるので、平等に触れ合う機会となると、学校に高齢者が来て、教えていただくというのがありがたい。学んだことを生かす場として学校があってもよいのではないか。

本市にも人材バンクがあり、高齢者も多く登録している。コーディネーターが人材バンクを活用し、家庭教育学級や学校の教育活動に活用する、そのようなシステムを県下でつくることも必要ではないか。

委員 そのシステムは、本市にもある。高齢者から若者まで、地域の大人たちが「先生」として登録していて、求めに応じて学校に話に行くというシステムである。また、登録している「先生」同志の集まりがあり、学び合う場も設定されている。企業やNPO団体なども登録しており、繋がりがシステム化されている成功事例だと思う。

歌人の俵万智さんが新聞連載している記事の中に、地域みんなで味噌を手造りをすることに感動し、不便さ、効率的ではないことにゆたかさを感じていた。都会にはない宮崎にしかないよさを大事にして、子どもたちに伝えていくことも必要ではないか。

委員 方策のレベルが何段階か必要なのではないか。「広く学びと出会う段階」、「自ら学びを創らせる段階」、「小さな実践を行わせる段階」というように、参加から参画へ向かわせる方策として、重層的にステップアップできるといいと思う。

議長 生涯学習は、英語で言うと「Lifelong learning」で、「learning」には、昔は学ぶことと教えることの両方の意味があった。学んだことを外に発信していくというアクティブ・ラーニングの一環であると思うが、子どもたちを動かす方策について、他に事例はないか。

委員 先日小学校の役員会の中で、各地区の一年間の活動報告があった。どの地区でも高齢者の方が参加して、夏祭り、十五夜、餅つき、収穫祭などを行っていた。きっかけは何であっても、それぞれの気付きがあればよい。子どもは、家族以外の話は受け入れやすく、自分に生かそうとする。強制的でも行事等に参加させることで、保護者の意識も変わるのではないか。

また、家庭教育学級の参加が少ないのが課題であるが、授業参観日と抱き合わせで家庭教育学級の講演会を実施し、その間に子どもは、地域の見守り隊の方々との交流するという事例もある。

委員 学びを生かす場として、今は、学校の開放が難しくなっている。また、昔は先生たちも地域に住んでいて行事と一緒に参加していた。先生方も地域の一員として地域を盛り上げていくことに意義があると考えている。多忙で子どもたちに触れ合う機会が少なくなっている。学校を地域の活動の場として開放することが大事である。

委員 家庭教育学級で、演劇の手法を使ったワークショップを何度かやっている。保護者だけでなく、子ども、学校の先生も入ってゲームをするのだが、ステータスを取っ払った平等な状態で、見たことのないお互いを知ることができる。

これから要介護の家族を対象にしたコミュニケーションワークショップを開設する予定である。これが要介護の家族だけでなく、子どもから大人まで、誰かのことを思

うということテーマにしたワークショップに発展すれば、身近な人から様々な人を見ることができる目が育つのではないかと考えている。

介護の世界では、食事や風呂の介護だけではなく、これまでの人生やこれからどう生きたいかということに寄り添うことが重要で、子どもも大人も一緒に学ぶ機会があれば、人を思う気持ちが街全体に広がっていき、そこから地域の文化なども一緒に学ぶことができるのではないかと思う。

委 員 我々は自然からできている生き物なので自然を理解することが重要である。総合政策課の資料にもあるが、宮崎は自然が豊かだということは県民みんなが認めている。それを生かす必要がある。自然の優しさや怖さ、恵みなど自然から学ぶことは多い。

「森のようちえん」という活動があり、子どもたちを年間を通して自然に触れ合わせるとい取組が全国で広がっている。本施設では、その取組を参考にしながらオリジナルの自然体験活動を広げようと考えている。今の子育て世代があまり自然体験をしていないので、子どもたちに自然体験のさせ方がわからない。親も一緒に自然体験してもらい、自主的な活動に発展させたい。そのことで自然のことを理解し、自慢できるようになるのではないか。

議 長 時間が来たので事務局にお返しする。

7 閉会行事

- 生涯学習課長あいさつ
 - 諸連絡
- ※次年度の審議日程について